

## Monthly Report 月間報告 2001年4月～12月

### 2001年4月

アフリカはアフリカ

病気発生から2週間が経ち、ようやく体調も安定してきました。皆様には大変ご心配おかけいたしました。皆様のお祈りありがとうございます。今週からはアムハラ語の研修を始めることができるようになりました。

エチオピアに来て2ヶ月。高度2400mのところにある首都アジスアベバでも、夜はぐっすり眠れるようになりましたが、大体この時期になるとこれまでの疲れが一気に出るとも言われています。確かに少し標高の低いところに行くと楽に感じます。また、お腹にガスがたまったり、下痢気味になったりを繰り返すのもこの土地で生活すると良く起こることのようです。

ちょうど4月のイースター休暇で、首都アジスの様子をうかがうことが出来ました。エチオピア正教の信者はこの2ヶ月は断食で肉類は一切食べることができません。主イエスが復活された日曜の朝早くから、いよいよ肉解禁の始まり。至るところで鶏、羊が売買されては殺される前の最後のうめき声が聞こえます。そして、その日の昼頃には殺された羊の毛付きの皮が路上で売買。午後には羊の皮の山が至るところで見られるようになります。

アフリカの人達は肉を朝昼晩食べても飽きません。さすがに1日で私は降参しましたが、どのレストランもこれからの2ヶ月ぐらいは肉だけのメニューになるのだとか。野菜に飢えるこのごろです。

さて、腸チフスと思われる症状が出始めてから、4度同じ病院に足を運びました。ちょうどアメリカのCNNが放送されていたので、毎回血液検査をする毎に1時間以上待たされるので、暇つぶしにはちょうど良かったです。この待ち時間の中に、小泉内閣誕生のニュースが流れていました。

結局血液検査では腸チフスであることは十分に証明されず、総合外来の3人の医者が全く違う意見を言ったので混乱していました。しかし、出ていた症状などから最終的に内科専門の先生が腸チフスと判断しました。早めにそれに対応した薬を飲んだおかげで回復に向かいました。いずれにせよ、腸チフスや様々な病気の経験者である野田さん(JIFH所属の)がいてくだ

さらなかったら、適切な処置が早い段階で出来なかったことでしょう。ニカラグアではなかったような多くの病気が身近にあるエチオピアでは、病気に関してもこれから自分でしっかり情報を集めて勉強していかなければなりません。

また、この月にはエチオピアの歴史上初めてと言われるほどの一般市民の暴動が発生し、一時緊迫した雰囲気首都アジスアベバを流れました。今では落ち着きを取り戻し、車で走行することも可能になりましたが、以前よりも警察官が街中でよく見られるようになりました。また何が発生するかわかりません。

ここは樂園のようなニカラグアではありません。エチオピアはアフリカです。全く違う国に来ているのだということを、改めて感じさせられた月でした。

## 2001年5月

「アー、ウー、イー、アー、エー、エー、オー」

アムハラ語の基本的な母音は7つ。6番目の「エー」は「ア」と「オ」の間のようなこもった発音をカタカナでは表記できません。33のアルファベットがあり、それぞれの文字がこの母音に対応して少しずつ文字も形を変えていきますので、合計231の文字に加えていくつかの「ア・オ」などの二重母音が含まれます。

私にとって、アムハラ語は、英語、スペイン語に続いて3つ目の外国語になりますが、独自の文字を持つアムハラ語には苦戦しています。もちろん英語表記で会話を習得して、少しずつ文字も勉強していけばいいのですが、アムハラ文字を知っていれば発音の仕方への理解がより深まります。日本語でも漢字を知っていればその言葉への理解も深まるのと同じです。

さて、今回はSIM(Serving In Mission)というエチオピアに1920年代から宣教の働きをしているアメリカのクリスチャン団体が、宣教師育成のために独自に持っている語学研修施設でお世話になりました。SIMだけでなく、Save the ChildrenやイギリスのNGOからの人材も含め、合計13人が集まりました。SIMの宣教師達は10,20年のスパンで滞在を考えていますから、10ヶ月も語学研修に費やします。日本にはまだまだここまで覚悟を決めてやってくる人はいないだけに、彼らの献身に頭が下がります。今回私が参加した4週間短期コースは、あくまでも初歩的な日常会話ができるようになるのが目的のもので、私にとっては良い導入部分となりました。

たが、まだまだ訓練が必要です。

さて、語学の習得にはまず忍耐が必要です。アルファベットの練習、簡単な単語の反復などは、まさに小さな子供がおしゃべりの練習をしているのと同じですから、中には恥ずかしさを覚える人もいます。過去にこの SIM でアムハラ語を習得したある韓国人は、ある日先生に「いまこんな子供のようなことしているけど、実は韓国ではとても偉い男なんだけどね…」と自分のプライドを取り戻すかのように言ったそうです。

自分のプライドも何もかも捨てて、まず自分が低くならなければなりません。分からないことだらけですから、忍耐が続かないこともイライラすることもあります。そして、言葉そのものだけでなく、文化への理解、人との関係をも築きながら、その語学が自分の物になっていきます。

まさに語学の習得は、小さな種から芽、そして実がなるまですべてを支え続ける農作業のようです。始めに土を柔らかく耕さなければ種も蒔けないように、心を無にして柔軟に構えなければ基礎が身につけません。蒔いた地に水を蒔き、草抜きなどの手入れをするように、日常で会話の訓練を続けなければ上達しません。蒔いた種すべては発芽せず、また芽はすべて姿、形が異なるのと同じように、母国語ではない外国語は完璧にはなり得ません。発音、読み書き色々な面で弱点は持ち続け、またいつまでも学びつづけるものです。そして、いつかは小さいながらも実がなるように、新しい言葉を習得することで良好なコミュニケーションがはかれ、またすばらしい友も与えられます。それが人生を 180 度変えることもあります。

「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」ピリピ人への手紙 2:6-7

まさに私達のために主イエスご自身が低くなられ心砕かれた姿を思います。どんなに謙虚に、低くなろうとしてもなりきれない自分がいつもいます。罪深く、主の御前に値いもしないこの者をも、一方的に主のほうから受け入れてくださり、恵みを与えてくださること。その恵みの中にこれからも生かされ、またアムハラ語の学びもそこからスタートしたいと、その思いを新たにさせられるこの頃です。

## 2001年6月

### 日本からのゲスト

世界の食糧問題を考えるために国連が制定した10月16日の世界食糧デーは、JIFH(日本国際飢餓対策機構)主催で毎年実施されていますが、その中で今年開催10周年を迎える北海道・登別の実行委員会の方がエチオピアを訪問されました。ひとつの家庭から、80年代の飢餓を覚えて節食デーを毎週行っていたのを歯切りに、登別アフリカ飢餓の国を支援する会が発足、そして教会の枠を越えて、教育委員会を始め、ロータリークラブ、国際ソロプチミスト登別、校長会、老人クラブ連合会、登別市婦人連合会など、市民全体をとりこんだ大会をされています。

今回は、捧げてくださった支援がどのように用いられているのかを見ていただく良い機会でした。具体的に手堀井戸や簡易トイレ、育苗場などの視察、そして活動の困難な低地を高地から眺め、現地スタッフの苦勞を少しでも垣間見ることのできる時となりました。

支援者、そして支援を受ける側とは、時として持つ者・持たざる者の上下関係となってしまうがちです。しかし、今回のゲストの方が、決して高額支援を短期間に集めておられるのではなく、自分の普段生活を振り返りつつ、地道に捧げられた結果であることを、現地のスタッフにも強調されました。あくまでも対等のパートナーの関係であること、そしてお互いが学び合うことがいつも求められます。

### ウガンダ訪問

エチオピアでの就労ビザ取得に必要な再入国ビザのため、一時国外に出ることになり、6年間里親プログラムに従事して来ている沼田スタッフのいるウガンダへ訪問してきました。FHIフィリピンで3年間里親プログラムに関わってきた浜名ご夫妻もウガンダ訪問を計画していたので、彼らと予定を合わせ FHI(国際飢餓対策機構)ウガンダでの各プログラム地の訪問を共にしました。

6つの地区で合計約2100人の里子を支援しているウガンダの里親プログラムも、ある地域では治安上の問題で撤退を余儀なくされているところもあり、今年はその変革の時期に当たり慌しい様子でした。JIFHが支援するブンタバ村は、まさにニカラグアで目にした光景にそっくり。庭を徘徊する豚、鶏、トウモロコシ、バナナ畑、パパイヤ、マンゴの木、森に囲まれ、小さくこじんまりしたコミュニティー。木がなく広大な地に村人が分散して住むメタロビとは雰囲気異なる

ります。なつかしく、またほっとする一時でした。

この地域の里親プログラムは、すぐに里子を決めて支援をはじめめるのではなく、まずこのコミュニティの潜在的な自助努力の力を引き出すために、省燃費型かまどの作成を通して村人の参加を促しました。その結果、地域の学校建設においては建設資材であるレンガも自分達で作るなど、村人の積極的な動きが始まり今に至っています。農村開発のプロジェクトが、ただ物を与えてそれで終了してしまうのではなく、プロジェクトの投資は少なくても、それをきっかけに自分達で村の問題を解決するために先導能力をつけたことは、大きな成果と言えます。カタレという地域の里親プログラムマネージャーも、これからプロジェクトが村から撤退することの準備を積極的に行い、住民に任せる体制作りをしてきています。プロジェクトの規模は小さくても、地道にその村の自立を促していくこと。これは気の長い仕事です。プロジェクトを担当するスタッフは、なかなかその成果が目に見えてこないで、自分の評価を上げるために、数値で表すことのできる活動を実施しがちです。しかし、一番大事なものは、私達がどれだけ住民にとってファシリテーター（促進役、脇役）になれるかであって、住民のためにどれだけ井戸を掘った、学校を建てたかの数量の問題ではありません。

支援を受けた側は、プログラムを通じてどのような成果が現れたのかを、支援者側に十分に説明する義務があります。支援によって建設したトイレ、井戸、学校の数を報告することは容易ですが、果たしてその結果地域住民はどのように変化したのか、自分達で自分達の問題を解決できるようになったのか、その評価は困難を極めます。FHI エチオピアが実施してきた数々のプロジェクトのなかでも、村からの撤退後、実施していたプログラムがうまく機能しなくなっているケースがあります。

農村が外部者である FHI への依存心を高めないためにも、援助はいつか終わらなければなりません。それがいつなのかを見極めること、また FHI がいなくても住民がやっていける方法を、プロジェクト開始する時から住民と共に考えて具体的な行動を起こさなければなりません。プロジェクト実施期間を残りあと 1 年半としているメタロビプロジェクトも、今そのチャレンジを受けているところです。「計画では来年撤退するから」ではなく、住民がどのような知恵を持って自分達でやっていこうとしているのか、共に探り合う必要があります。まだ、現地の言葉で村人とコミュニケーションはとれませんが、すこしずつ地域に密着しつつ、地域の人々のプロジェクトが地域の人達によって動かすことができるよう、そのお手伝いをしていきたいと思いません。

## 2001年7月

### 遊牧民の課題

「エチオピアの飢餓」と聞くと、エチオピアという国全体が食糧不足に喘いでいるかのように理解されがちですが、実際にはある一部の地域での出来事です。その地域のひとつ、エチオピアは東部ソマリ州には、ソマリ族という遊牧民が家畜を頼りにした遊牧の生活をしています。農耕しない彼らの基本的な食糧は家畜からのもの、つまり牛乳や肉です。長期間雨が降らないと家畜の餌となる牧草も生えず、まず家畜から命を落としていきます。そして、食糧の源である家畜が死ぬと、今度は人間の命が危ぶまれます。こうして、昨年までの旱魃により食糧、水を求めて多くのソマリ族がジジガなどの街へ流れ込み、世界中から緊急援助が実施されました。これを受けて JIFH(日本国際飢餓対策機構)が看護婦スタッフ派遣、食糧配布センターの支援など緊急事態に対処しましたので、その現場および現地の協力団体を訪問しました。

モハメッド・ゴアヘッドさん(30歳)は、37頭の牛、40匹の羊、4頭のロバをもっていました。旱魃により今は2頭のロバを残してすべて失いました。食糧を求めてファファンという食糧配布センターが設置された町にたどり着くおよそ300kmの道のりの間で、3人の子供のうち2人を亡くし、今は奥さんと子供ひとり。見渡す限り木のない荒地で、直射日光と強風から身を防ぐかのように、人の身長ほどの高さしかない小さなドーム型のテントに住み、不定期にやって来るごくわずかな食糧を頼りに生活しています。配布センターで働くスタッフのひとり、ファファンの街に元から住む住民(半遊牧民)にとっては、この避難民はよそ者。政府が配布する食糧が来ても、地元民に横取りされ一番必要な人々の手に届かないこともあるのです。」と現状を説明します。「緊急だから食糧を」と、海外から送られた食糧が必ずしもすべてが末端まで届かない複雑な事情があることを、私達も理解しなければなりません。イスラム勢力の強い地域でもあることから、キリスト教系の民間援助団体が支援するセンターに頼る避難民に、その団体の悪い噂を故意に流したりなどの、妨害行為も頻繁にあります。

一方、モハメッドさんの隣りに住むひとりの人が、不衛生で劣悪な生活環境の中、結核症が疑われジジガ市内へ送られたところでした。訪問したファファン食糧配布センターでは、皮膚病を患った子供、栄養失調で元気のない子供も多数見うけられました。与えられたミルクを飲むことさえできず、鼻からチューブを通して栄養補給するほどの子供が昨年の段階では多く見られたというものの、今回はいくらか改善されたのか、そういった状態の子供達を見ることはなく私達を安心させました。

しかし、ジジガ市内の結核症の治療センターでは、依然100人を超える患者が6ヶ月から8ヶ月

月に渡る長期の集中治療を受け、それでもベッドが足りず毎日センターの門をたたく新しい患者が今でも絶えないとのこと。地道な治療が要求される結核症の患者に対して、日中は伝統工芸品の作成や保健衛生教育の実施を通じて、完治までの時間を有効に使うよう配慮し、センターを出た後も自活していける方向性を与えます。今後の大きな課題は遊牧民である彼らのリハビリ、自立です。すべての所有物を失った遊牧民は、生活の基本となる家畜と、最初数ヶ月分の食糧がなければもとの生活に戻ることができません。ファファンの街周辺にいる遊牧民だけでも4500人は下らないと言われる中、それぞれの世帯に20匹の羊かヤギ、1頭のロバ、そして先6ヶ月分の食糧を与えるという支援は、金額的にも困難を極めます。また、何百キロも歩き回る遊牧の民ですから、支援した効果を評価するのも不可能です。

遊牧といえども、水・牧草のある場所をしっかりと把握し計画的に行動している民族です。しかし、自然の理にはかきません。エチオピアの食糧不足地域は東部だけでなく北部にもあり、それぞれの地域が緊急事態、特に旱魃による被害・食糧危機に陥る前の「予防策」が求められています。農耕民族であれば旱魃に強い種の作物生産や、相互扶助システムを導入したコミュニティー作りなどが考えられますが、遊牧民にはそもそも「コミュニティー作り」の考えが存在せず、家畜飼料の備蓄や人工的なため池作りなどが緊急への予防策として上げられるのみです。

エチオピアは今雨季の真っ最中。比較的の雨量の多い西部は、メタロビも含めいつもこの時期は緑におおわれ、政府が奨励する化学肥料、改良品種の種子で今年も大豊作が見込まれています。ここ近年、借金をして高い化学肥料・種子を買わされている農民達は、穀物価格の下落で利益を得られずさらに借金を抱える形になっています。同じ国でありながら一方で飢え、一方で過剰生産がある現実。援助は決して一筋縄では行きません。私達がこれらの問題にどう取り組んでいくのか、試される時です。

## 2001年8月

「私は5人の子供がいる。でも、今持っている土地すべてを子供達全員に分け与えても、次の世代を養えるほどの土地にはならない。おまけに年々土地は痩せて十分な穀物の収穫も得られないし、これからどうしていけばいいんだ…」

メタロビプロジェクトの農林業部門が主催、メタロビ郡の農業局スタッフを招いて地域の土壌保全についてのセミナーを実施した時に、ひとりの農民がこのような切実な問題を投げかけてきました。ここ数年の人口増加に伴って、地域の土地が年毎に細分化され、各世帯が食糧生産に十分な土地を保有できなくなって来ていることを人々は危惧します。また、薪を求めて人々が木を伐採しつづけるので、保水力を失った大地は急激な大雨によって表土もろとも流出し、ただでさえ限られた土地が肥沃でなくなり、農業生産も低下します。今はその場しのぎで化学肥料を施して無理やり生産を向上させているものの、近い将来、いやすでに現在多くのメタロビの農家は、高額で毎年値段が上がる化学肥料に頼らなければならなくなっています。

皮肉なことに、穀物生産が増加したことでここ数年穀物価格は急激に下落しており、化学肥料購入時の借金を返せずに困っている農家が続出しています。増える人口、痩せる土地、減少する森林、追い重なる借金。さらに貧困の罠に追いこまれるエチオピアの農民達。本当に将来、外からの援助がなくてもやっていけるコミュニティーを建て上げようとしているのか、とても厳しい質問が農民から突き付けられたことで、私達 FHI/E (Food for the Hungry International/Ethiopia: 国際飢餓対策機構エチオピア)は大きなチャレンジを受けているところです。

1997年に開始されたメタロビ農村自立開発プロジェクトも5年目に入り、来年度でのプログラムの終了まであと1年半となりました。私自身、過去3年間中米ニカラグアにて有機農業による土壌改良、野菜生産などに関わってきたので、これからメタロビでも同じように持続可能な農業スタイルを農民自身が確立していけるようなお手伝いをしていく予定です。しかし、プロジェクトも最終段階にある現在、最も難しい課題が私達にのしかかっています。それは、どのようにプロジェクトを終了できるか、つまりどのようにメタロビの住民がFHI/Eの助けがなくても自分達の問題を発見、解決していけるか、自立していけるかの問題です。

### 結果と継続するためのインパクト

プロジェクトのひとつ・飲料水と保健衛生部門。手堀井戸・簡易トイレなどの建設と並行して地

域住民の保健衛生に関する知識の向上にも努め、人々の生活習慣がより衛生的になり、下痢や腸内寄生虫症等の疾病が大幅に減少しました(プロジェクト開始時より 34%)。課題は衛生施設設置後の人々自身による維持・管理です。集落ごとで選出された飲料水・衛生施設管理委員会が責任を持ち、修理や部品交換のために必要な財源確保のため、毎月各世帯から住民が取り決めた一定額(3 円から 5 円程度)を徴収しています。しかし、本当に井戸が 10 年後に残っているかどうか、大きな故障時への備え、住民の危機管理意識が問われるところ です。

住民自身の運営による育苗場・実験農場、土壌保全へ取り組みを奨励している農林業部門では、今は私達外部の者が首都から必要な種子、道具の購入・運搬などの仲介役を担当出来、プログラムもすべて順調に機能しています。しかし、人々が将来本当に自分達で続けられる仕組み、動機付け・やる気がない限り、地域緑化に不可欠な育苗場、温暖な低地での果樹栽培なども地場産業として根付きません。自主的な農業組合の組織化など具体的に考えていく時です。

野菜栽培、養鶏を通して栄養改善、また衛生教育、家計向上など特に女性を対象にプログラムを実施している生活改良普及部門。女性の薪運び・石臼を挽くなどの重労働軽減のために省燃費型かまどの導入、製粉所設置をしていますが、これらのプログラムも参加住民がしっかりその必要性を理解し、管理運営出来る力を育てなければいけません。

これら3つの活動に沿って、住民組織・リーダー育成部門を設置し、地域の自立開発を目指しています。まさに、メタロビの住民が自分達だけでやっていける体制作りを担う大切な根幹といえます。プロジェクト開始以来、各村落単位で村づくり委員会の育成に力を入れてきました。プログラムの維持・管理を担うだけでなく、自主的な地域開発の先導役として機能すれば、「もう FHI/E はいりません」と言えるコミュニティーができるきっかけにもなります。幾つかの村づくり委員会が共同組合として団結し、政府の目の届かない低地に自主的に非公式の学校を作りました。学校運営費を共同組合による製粉所運営で賄う方向で、この組合が政府の公認を受けられるよう準備をしてきましたが、国の共同組合振興委員会は組合の収入を非公式学校などの公共サービスに用いることを禁止してしまったので、この新しいタイプの共同組合のあり方、また村づくり委員会の将来へのビジョンをもう一度検討しなければなりません。

プロジェクト終了までに「幾つ井戸ができたか」の結果ではなく、私達がここを去る時に「どんなコミュニティー、人々が育ちつつあるか」つまり人々へのインパクト、心の変化に焦点を当てて行く時です。人々が様々な問題に対して「自分達でやっていける」と言えるように、村人が中心になってプロジェクトを担い、また蒔かれた地域の自立開発の種がこれからも芽生え、成長していけるよう、人々と共に考え、出来ることをしていきたいと思います。

## 2001年9月

9月11日

アメリカでのテロ事件が発生したその日はエチオピア暦のお正月。新しく1994年を迎えられた事を祝っていたところでした。エチオピアでも事件がすぐに報道され、アメリカ大使館や関連施設には近づかないようにという警告が日本大使館からも出されました。人口の約35%がイスラムを占めるエチオピア。昨年早魃に襲われ多数の避難民が出たソマリ州はほぼイスラムの民族ですから、今後どのような展開になるか予想できません。しかし、今のところ目立った騒動もなく落ち着いた雰囲気が続いています。

アメリカ政府はタリバンへの報復措置を取ることで事を解決させようとしているようですが、暴力に暴力で対抗する事に本当の解決があるのか疑問です。特にイスラム教とキリスト教が共存しているエチオピアでは、違いを乗り越えた「和解」を求める声が大きいです。もちろん、普段からイスラム教の事を報道する時に、先進国のメディアはイスラムの良い点を避け、逆に紛争などの否定的な側面と絡め「イスラム＝原理主義者＝テロリスト」という構図を勝手に描き、今回の事件もそれに擬え無意味に反イスラム感情を駆り立てているように見えます。歴史的には冷戦時代の大国間の利害関係がアフガニスタンの内戦を生み、結果としてタリバンという過激組織が出てきたのですから、一概に今回の事件を「宗教対立」と見るのも誤りだと思います。

さて今月末、エチオピア北部の町ラリベラを訪れました。13世紀に岩をくりぬいて建設されたエチオピア正教会の建物が街の中にあり、ユネスコの世界特別遺産にも指定されているものです。(写真:岩の教会、司祭達)歴史のある建築物が残されているだけではなく、日夜聖書を朗読し一生を過ごす修道士達(写真)、静かに礼拝堂で祈りを捧げる人々を見るにつけ、神という存在への畏れ、へりくだりの姿を学ばされます。自分の信じているものが一番であり、他は異端として非難をしがちなエチオピアのプロテスタント教会とは異なります。正教会の賛美歌も日本のご詠歌のようなゆったりとしたメロディーで、どこか東洋的な雰囲気が流れるのも不思議でした。週末になると、アジスアベバの街はこのエチオピア正教会の賛美歌とイスラムのコーランが大きなスピーカーから流され、行き交い、独特なハーモニーを醸し出します。

エチオピア正教会(オーソドックス)は欧米や日本のプロテスタント教会が信じる教理とは多少異なるものの、古くは同じキリスト教の流れを持つ信仰です。礼拝のスタイルや考え方が「違う」からといって、その場で切り捨ててお互いの関係を築こうとしないのでは、それこそ世界の分裂の始まりです。どの宗教も「平和」や「和解」を求めているのに、違いを強調するばかりに

お互いを傷つけあっているのも宗教が原因として上げられるのも皮肉なものです。

テロによって犠牲を受けた人々の家族、友人の悲しみを前に、自分の無力感を否めません。しかし、「何が違うか」ではなく共通するものを探りつつ歩む努力をする事。それが、特定の宗教観をもっている人々に、そして全人類に求められていると思います。テロの犠牲を受けた人々と家族の上に慰めと、そして今回の事件をきっかけに更なる飢餓状態と直接攻撃に巻き込まれつつある400~500万人ともいわれるアフガニスタン難民の上に平和と生きる糧が与えられますよう祈ります。

## 2001年10月

エチオピアの日本の地方都市、共通の悩み？

最近、エチオピア政府の閣議提案で、内閣の大構造改革が出されています。その中に、貧しい農村地域の復興、開発を行政主導とする意図を匂わせる「農村開発省」の新設、また国の発展のためには人を育てる事が必要という事で、「人材育成省」なるものも出現することが討議されています。もちろん、審議にかなりの時間を要し、すぐの実現する事ではありませんが、エチオピアの農村開発に市民レベルで関っている立場としては、とても気になる動きです。エチオピアは世界でも有数の官僚的な国であり、貧しいコミュニティーのためにやってきた国際NGO(民間援助団体)に対して過剰な干渉をします。農村開発のプロジェクト開始には、プロジェクト実施計画、それに関する物資(特に車やコンピューター等)の購入計画、予算まですべてに、州、県、郡それぞれのお役所の合意が大前提です。もし、予算通りに計画実行されなければ、不足金額分を担当役所に渡さなければならない州まであります。その意味で今回の構造改革は、エチオピアの農村開発を、そこに住む市民が中心になって動かしていくのではなく、行政主体で役人の利権構造に拍車をかけることに繋がりそうです。

そもそも、農村開発はより良い生活のために、そこに住む人達自身が作り出すプロセスです。植林、井戸掘り、学校建設をすること自体が開発ではありません。私が携わるメタロビのプロジェクトも、育苗場設置や飲料水施設の建設などに関っていますが、最終的な目的はコミュニティーが今後自分達でこういった地域開発への動きに意識を持ち、参画そして実行していけるように「人々」を育てていくことです。つまり人対象の「動き」であって、1つの「事業」ではありません。しかし、行政はこの終わりのない人々の動きを忍耐強く支え続けるビジョン、資源、そして人材もありません。まさに、開発は「事業」、つまり国際NGOからどれだけ大型プロジェク

トを誘致し、その地域にお金を落とせたかがその役人の業績になるわけです。また、地元の大学を卒業しても職業がないエチオピアにあって、豪華絢爛なオフィスを構え、物資投入型の大きなプロジェクトのために高給で現地スタッフを雇い続ける国際 NGO が乱立しています。「貧しい子供達のために」としながら、その裏ではコミュニティーだけでなく、地域の役人、そして現地の優秀な人材をも「援助」に依存させる体質を生み出している現実があります。

翻って日本では、地方都市復興事業と名だけ掲げ、国がばらまく補助金で無駄なハコモノづくりをし、一向に人の集まらない施設を作っては壊すを繰り返しています。地域の土建・流通業界と癒着をして、どれだけ資金を地域に誘致してプロジェクトを実施し、その「世話代」を横流してきたかが役人の「キャリア」になっている点、エチオピアの農村開発の事例とどこか共通点があります。地域が中央など「財源」への依存体制から脱却しない限り、また「まちづくり」のビジョンをしっかりとった住民が自身で動き出さない限り、日本もエチオピアも本当の意味での地域開発、まちづくりは実現しないでしょう。

もちろん、日本とエチオピアの経済格差、生活レベルも全く異なりますが、基本的なサービス（教育、保健、水など）を受けられないエチオピアのコミュニティー、過疎化の進んだ魅力のない日本の地方都市は、双方同じ質の問題を抱えています。それは、住民が現状を「何とかしたい」というより、誰かに「何とかしてもらいたい」という依存体質です。外国の NGO がエチオピアに来る事によって、地域の依存体制を更に悪化させている事もあります。一方「自分達で何とかしたい」そういう住民を対象に、メタロビでは地道に努力しています。しかし、一夜でできるもではなく、気の長い取り組みで様々な困難が伴います。将来的に地域住民が「自分達でこの村を作り上げています」と言えるコミュニティー開発に関っていきたいと、いまその思いを新たにさせられているところです。

2001年11月

人が主体

私に関わるメタロビプロジェクトは3年間の第2期実施期間も半ばに差し掛かり、予定していた州政府によるプロジェクトの中間評価が実施されました。州の災害予防対策委員会、農業省、灌漑開発局、州水資源開発省からそれぞれスタッフがプロジェクトに派遣され、およそ10日間で実施します。プロジェクト開始時の活動予定と現在の進捗状況を照らし合わせて、プロジェクトの達成度評価、会計監査、またコミュニティの受益者へのインタビューなどを通してプロジェクトの効果などを評価します。その後、1ヶ月以内にひとつの文章としてまとめられますので、結果は次の月に報告いたします。

さて、何を持ってプロジェクトを評価するのか？先月の報告でも触れましたように、州政府側は国際NGOから少しでも多額の投資を確保することが第1の関心事です。プロジェクト開始時に約束した数の井戸が掘られているか、野菜栽培の参加人数は満たされているかなどが評価の際の主な焦点になります。NGOは地元政府がやるべき仕事を肩代わりしている下請会社のようなものと言っても言い過ぎではないのが、悲しいかなエチオピアの現実です。

しかし、私達国際NGOの本来の目的は政府に喜ばれるための「ハコモノづくり」ではなく、必要を抱えたコミュニティ（人々）が自分達で問題を発見、解決してお互いを支えていける力をつけていくためのお手伝いをする事です。ですから、本来のプロジェクトの評価というのは、目に見える井戸、育苗場、改良かまどが人々によって有効に使われているかということ以上に、プロジェクトの存在によって人々の暮らし、また考え方・生き方がどのように変化したのかに焦点が当てられるべきです。つまり、プロジェクトの成果は「人」に如実に現れるはずのものなのです。

それでは、外部からゲストが訪問した際に、プロジェクトのスタッフが真っ先に見せる物は何か？手堀井戸、湧水貯水槽、改良かまど…。活動に関っている「人」ではないのです。もちろん、いつでも訪れればそこにある「モノ」とは違って、人の場合は畑仕事に出たり、隣家の葬式に出席しているなどで、会いたい時に会えないという事情もあります。しかし、自分が関る仕事の中で一番誇りに思っているものを客人に見せるのが自然である以上、プロジェクトに関るスタッフが自信を持ってコミュニティの「人」を紹介できないのは1つの大きな課題です。また、私自身もまだ現地の言葉で人々と直接コミュニケーションを取る事が出来ていないことから、比較的他の人よりも地域開発に積極的な少数の人々としか関係を築けていませんので、今後の私の宿題でもあります。

エチオピアはいよいよ今年の収穫の時期を迎えます。主食のインジェラ(クレープ状の主食)の原料となるテフ(ヒエ科の穀物)が、重い穂を垂れて収穫を待つのみです。プロジェクトもこれから終盤を迎えるに当たって、刈り取る事の出来る沢山の成果がコミュニティの中に、特に人々の中に現れるよう願いつつ、祈りつつ歩んでいきたいと思えます。

## 2001年12月

新ウルトラマンシリーズ(ティガ、ダイナ、ガイア)のビデオを鑑賞する機会があります。現在居候させていただいているお宅のお子さん達が熱中している番組であり、休日につられて私も楽しんでるわけです。人類では対処できない怪獣が続出するも、ウルトラマンが最後の最後に現れて怪獣を撃破、地球に平和をもたらします。必ず正義が勝つというシナリオが、うまく物事が進まない現実世界を生きる私達にある種の安堵感を与えるという意味で、この単純なストーリーについてのめり込んで最後まで観てしまうのです。結末には悪者が必ず退治されるという同じようなシナリオでは、ストレスの多い中年層に人気のある水戸黄門があります。このようなストーリーに安心感を覚えてしまう私にも、ついにオヤジ化の兆候が現れているのか…。

さて、いつもこのウルトラマンシリーズを観て感心する事のひとつは、彼らの最終目的がいつもの行動の中で明確にされているという事です。つまり、いつもめまぐるしく変わる様々な怪獣を前にし、時には負けそうになる時があっても、ウルトラマンに変身する隊員は人類・地球の平和というゴールを見失わないという事です。とても単純なことですが、同時に重要なことでもあります。怪獣を倒すという行動を通して、一時的な実績をもたらしますが、もっと強い親分怪獣が出現し、それをも倒すという成果を生みだします。やがては世に闇をもたらす大怪獣をやっつけて、ついにゴールとして人類への平和がもたらされます。自分の素性は世に明かさずとも、大切な最終ゴールは見失わずにしっかりと果たしていく。最終ゴールに危機をもたらす存在には、迷わず勇敢に立ち向かっていきます。

日常の雑事に追われ、仕事における大切な目的をつい忘れがちになる自分が対照的に映し出されます。私が携わるエチオピアでの地域自立開発のプロジェクトにしても、すべてのスタッフがプロジェクトのゴールをいつも見据えて働いているとは言えません。毎月の報告書も「月間計画、活動リスト、翌月計画」の活動報告に留まり、活動を通じた実績、成果、そしてインパクトまでを見越したひとつひとつのプロセスは、なかなか話題に上がりません。計画した

活動ばかりに熱心になってしまうと、それが一体何のためだったのかということに心を向ける事が難しくなります。ましてや、最終的にコミュニティーにもたらしたいインパクトに対して、最善ではないと思われる活動があったとしても、それと気づかずに放任してしまう傾向があります。

“One minute for yourself” (Spencer Johnson 著)という本の中で、「自分を大切にし、自分に心を向ける1分間」が、ビジネス、そして人生の成功の秘訣」とあります。車の運転においても、交差点に出たら立ち止まってしばし周りを見まわしてから前に進まない、自分だけでなく他人をも傷つける事態を招きかねません。生活、仕事の中でも、ふと立ち止まって自分に、そして自分が目標にしていることに目を向ける必要があります。

ウルトラマンは地球上でたったの3分間でその仕事を果たします。正義の味方であるのに時間制限があるというのはとてもユニークです。それはある意味で、人類の平和という本来のゴールを見失わないために、さして重要ではない怪獣との戦いに多くの時間を割らないようにと意図されたことなのかもしれません。いずれにせよ、12月からプロジェクトのマネージャーとしての責任を任され、課題の多いプロジェクトに対しウルトラマンのように振舞えなくとも、自分達が目を注ぐべきところに目を注ぐ事から始め、最終的なゴールに向かって適切なプロセスを歩んでいけるよう、1日1日、そして1分1分を大切にしていきたいと思えます。